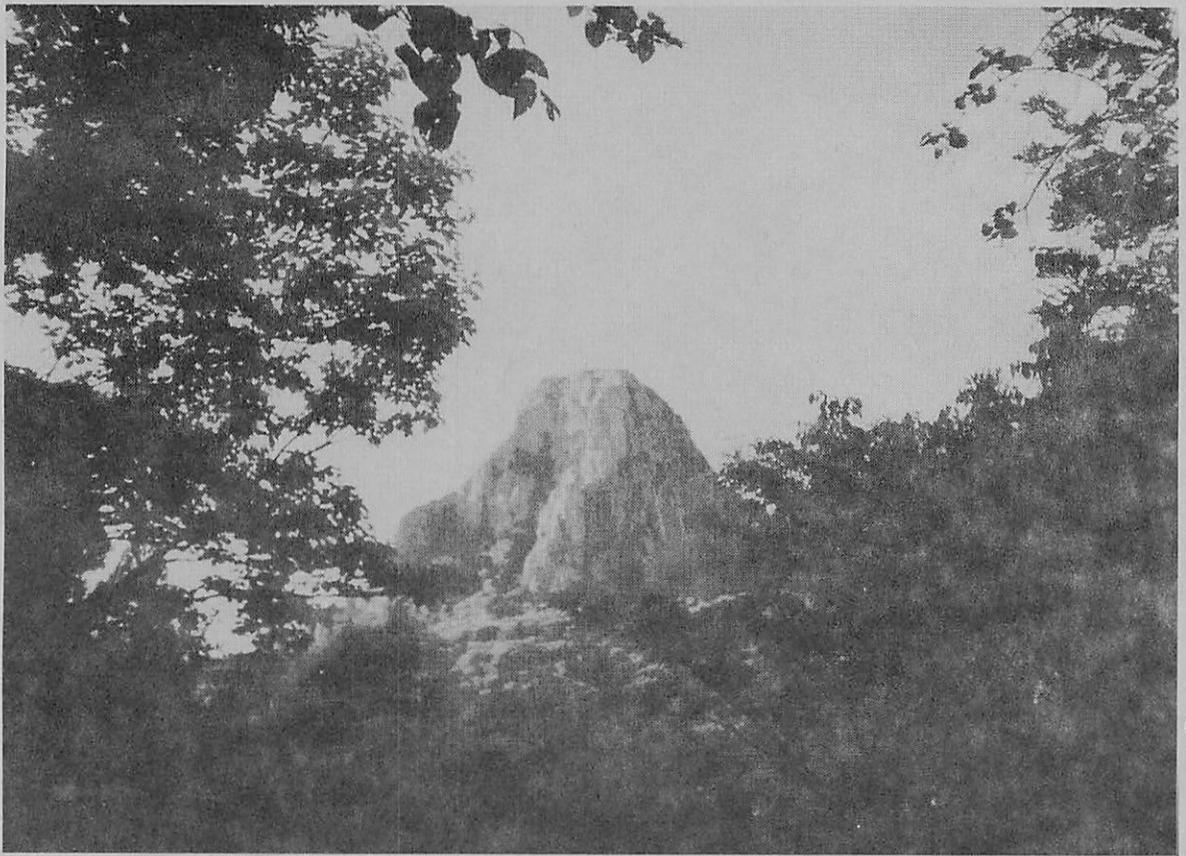


北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 41号

2001年4月~6月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

ROCK AND VALLEY 2001夏 No41



縫道石山南東稜を登攀中の本図。《Photo by kimura》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

ビバークの奨め

2日以上山中で過ごすには山の中で泊まる必要があります。その方法は様々ですが快適な順から山小屋泊まり⇒テント⇒雪洞⇒小屋掛け⇒岩小屋⇒ビバークの順番になると思います。(但しその時の条件によっては若干の差はありますが……。)今年の5月に山スキーで飯豊連峰を縦走した時に、無人の山小屋に2泊しましたが非常に快適でした。今までに山小屋経験は冬期避難小屋に1～2度泊まったくらいしかなく、(アッ!約25年前に5月の徳沢洞に泊まったことがあります。)今まで山小屋に泊まらなかったのはただ単にお金が惜しかったからです。しかし、そのおかげで山の中で泊まるという楽しさ・歓びを得た気がします。山の中で泊まるには山小屋よりはテント。テントよりは小屋掛けとよりシンプルな方法がベストと考えます。なぜならシンプルな方法で泊まる事によって山の中に溶け込み、一体化出来ると思います。山小屋泊では経験できない事がテント泊では経験でき、更にテント泊では経験できないことが小屋掛け泊では経験出来ます。私がビバークを初めて経験したのは約30年前の1月に三ツ峠山中で夜中に道に迷い、ツェルトを被って1夜を過ごしたのが最初でした。その時にはパートナーとは三ツ峠山頂で朝の7時に待合せていたので単独での夜間行動でしたが、道に迷ってしまい仕方がないのでツェルトを被って横になると、暗い山中からは様々な音が聞こえてきます。鳥の声、小動物らしきものが動く音、風による木々の音、山中に泊まって初めて聞く事が出来る自然の営みの音です。若かりし頃北アルプスを剣岳から

穂高まで1人で縦走した時に、1～2回はテントを張らずにテントにクルマッテ寝た記憶があります。その時には満天の星空を見ながら眠りについたが、星の多さに驚くとともに流れ星の多さに驚いた記憶があります。山の中でより多く自然に接するにはビバークする事が一番良いと思います。その後ビバークは沢山経験していますが、一番安心できるのは水の音が聞こえる場所での泊まりです。沢の流れの側にフライを張り、焚き火を囲んで宴を楽しみ、そしてフライの下で眠りにつく。この時の食事は出来れば持っていくのは米と味噌・塩・醤油の調味料のみで、その他の食材は現地調達を基本としてシンプルが一番。山の中では山菜・キノコ・岩魚等の食材が調達可能であり、もし調達が出来ない場合には米と調味料だけのシンプルな食事でOK。山の中で泊まるにはSimple is Bestが最高!!。山の中では可能な限りビバークを奨めます。ビバークをする事で山の中に溶け込み一体化する事で山の楽しみが広がります。しかし、緊急避難的な辛いビバークもあります。その時には辛いビバークと思っても後になって忘れられないビバークの1つになります。辛いビバークを経験すれば後々大きな自信になりますので積極的にビバークを経験して下さい。

木村 一

《目次》

2001年 夏号 4月～6月 ACC-J 茨城

巻頭言	(木村)	・ ・ ・ ・	1
目次		・ ・ ・ ・	2
集会報告		・ ・ ・ ・	3
山行報告		・ ・ ・ ・	4
浅草岳・山スキー	(笹平)	・ ・ ・ ・	5
生瀬富士	(本図)	・ ・ ・ ・	6
会津小野岳・山スキー	(木村)	・ ・ ・ ・	7
北アルプス槍ヶ岳北鎌尾根	(笹平)	・ ・ ・ ・	8
那須三本槍ヶ岳・山スキー	(木村)	・ ・ ・ ・	9
三ツ峠岩トレ	(吉田)	・ ・ ・ ・	10
つらかった記憶 (飯豊山)	(渡辺)	・ ・ ・ ・	10
飯豊連峰スキー大縦走突撃山行	(名雪)	・ ・ ・ ・	11
古賀志山岩トレ	(遠藤)	・ ・ ・ ・	12
縫道石山 (遠くの山シリーズ(代弾))	(本図)	・ ・ ・ ・	13
富士山・山スキー	(木村)	・ ・ ・ ・	15
会津駒ヶ岳・山スキー	(木村)	・ ・ ・ ・	16
燧ヶ岳・山スキー	(木村)	・ ・ ・ ・	17
谷川岳V字状岩壁右ルート	(遠藤)	・ ・ ・ ・	18
二子山中央稜	(渡辺)	・ ・ ・ ・	19
友好山岳団体の月報・会報・その他		・ ・ ・ ・	20
編集後記	(木村)	・ ・ ・ ・	22

表紙 縫道石山 (青森) Photo by kimura》

集会報告

[於 土浦 Gusto]

…………… [4 月]……………

4月4日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、笹平、鯉河

4月18日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、笹平、遠藤

…………… [5 月]……………

5月9日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、笹平

5月23日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、笹平

…………… [6 月]……………

6月6日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、笹平、鯉河、大須賀

6月20日

出席者 本図、木村、菊地、吉田、渡辺、笹平、遠藤、大須賀

山行報告

《2001年4月～6月》

..... [4 月]

4月1日	会津小野岳	L木村、名雪、松原、金沢
4月8日	二子山中央稜	L本図、渡辺
4月8日	那須三本槍ヶ岳	L木村、松原、吉田、他2名
4月15日	生瀬富士北尾根	L本図、いつものオバサン
4月15日	浅草岳	L木村、笹平、渡辺、名雪、松原、金沢、水島
4月22日	秩父7峰縦走	L本図、渡辺
4月28日～4月30日	飯豊連峰縦走	L本図、木村、渡辺、名雪

..... [5 月]

5月3日～5月6日	槍ヶ岳北鎌尾根	L笹平、吉田、渡辺、遠藤
5月4日	会津駒ヶ岳	L木村、軽部、鈴木（紫峰山の会）
5月5日	燧ヶ岳	L木村、軽部、鈴木（紫峰山の会）
5月13日	三ツ峠	L本図、木村吉田、渡辺、松原、金沢、他2名
5月20日	富士山	L木村、笹平、渡辺、名雪、松原、吉田、小林
5月27日	古賀志山	L笹平、渡辺、遠藤
5月27日	御岩山	本図 他茨城岳連

..... [6 月]

5月31日～6月2日	縫道石山	L本図、木村、渡辺、高田、木崎（産総研山の会）
6月10日	三ツ峠	L本図、渡辺
6月17日	谷川岳幽ノ沢	L笹平、渡辺、遠藤

浅草岳山スキー

2001. 4. 15

パーティー 木村一、渡辺聡子、名雪博二、水島幸男、松原丈夫、金沢清、
笹平孝

東京の人たちと小出インター近くで合流して、浅草山荘へ向かう。翌日、山荘近くの登り口へ車を移動して、道路脇から雪の上上がり、スキーで滑った跡を辿り登って行く。しばらくするとムジナ沢に出て、更に進んだ所から沢に降りた。ここでスキーを着けて登って行く。しかし、逆に疲れるので、スキーを外して歩くことにする。雪は、足首程のラッセルになり、少し歩きにくい。途中で、水島さんは浅草岳下る事になり、この先は六名で行く事になった。滝の所は、左岸を高巻き、少し進んだ所から尾根の急斜面を登り始める。稜線に出ると、スキーツアーの人たちが沢山登って来た。そして、ヘリコプターも忙しそうに頂上へ人を運んでいる。静かな山スキーから、人だら

けのゲレンデになってしまい、少し残念だった。ここから先は、人混みの中を浅草岳へ向かう。頂上は人だらけで、休憩する所も狭くて居心地が良くなかった。ここで、ビールを飲んだり、飯を食べたりして過ごす。下りは、ここからスキーを着けて、狭い稜線を降りる。所々にスキーツアーの監視員がいて、無線機で頻繁に交信していた。来る時に登ってきた所の近浅草岳くを降りて、スキーツアーの人たちと分かれる。30度くらいの斜面を、一気にムジナ沢まで滑り降りた。雪の状態も良く、気持ちよく滑れた。後は、登ってきた所を滑り降り、最後の登り返しの所は、うまくトラバースをしたので登り返さずに済んだ。山荘近くでは、ふきのとうが沢山出ていた。

(笹平 記)



鬼ヶ面山をバックに 笹平・木村

生瀬富士北尾根（仮称）縦走

2001. 4. 15

パーティ L本図一統、いつものオバさん

生瀬富士は、つい先日（4月1日）大雪の日にこのオバさんと登ったばかりだ。そのときのルートは、袋田小学校の裏手から尾根に取り付き、頂上を目指した。ガイドブックから得た情報とは違って、道は以外としっかりしたものだった。頂上で地図を見ていると、小さなピークを連ねて北々西に延びているノコギリ状の尾根があることに気がついた。2万5千図でピークを教えた。この尾根を忠実に縦走すると月待の滝から生瀬の滝までに31峰あることが分かった。今回はこれを歩いてみようとするものである。前日夜、自宅を出てビバーク地に向かう。入り口を少し探すが見つかった。なぜならば、1日に来たとき、次にくるときはここでビバークすれば良い、と目星をつけておいたからである。桜の木の下でとても気持ちの良い場所だ。ビールを飲みながらコースの検討を行う。俺と同じモノ好きはいるもので、ニフティのフォーラムで探したら、すでにこのコースを歩いている人がいた。でもその人は全コースをワンブッシュでは歩いていないらしい。今日は仕事の集まりがあり、夕方までには家に戻らなければならない。全コースをワンブッシュで、しかも半日で完歩しようとするものである。同行のオバさんの脚力では、アップダウンの多いこのルートを午前中に終わすのは大変だろうから明日は早立ちしよう。翌朝、この桜の木にモンキーを括りつけて出発地の月待の滝に向かう。月待の滝も観光地なので、駐車場はあるがトイレがないのには少々困った。道路の上にあるお宮に登る。お宮には白山神社と書いてある。この裏手から登り始める。里山であるのだが、西側はスッパリと切れて、落ちると無事では帰れない。結構険しいのだ。

道というほどのものではないが、踏み跡があり山馴れた人なら拾って行けるだろう。ただし踏み跡が縦横にあるので、5峰の下りでは間違えそうになるが磁石ですぐにルート修正した。このコースは地図と磁石は必携装備だ（どこの山でもそうであるが）。7峰と8峰の間には道路が横切っており、切り通しになっているので素直に降りられず、西側より巻き降りる。地形図には12峰辺りに道が書いてあるが探しても見つからなかった。しかし今はこの下をトンネルが通っており、完全舗装の良い道ができていた。10峰から11峰にかけて有刺鉄線があり、なんのためなのだろうか。むかし牧場にでもなっていたのかも知れない。13峰、14峰の西側は切れており、まあまあ迫力だが、残念ながら岩登りの対象になる岩質ではない。所どころに自生ランが花を咲かせていた。なんでもブームのころは袋田何号とかいって、珍しいものは十万円もしたそうだ。そういえば、以前、ランを採りに男体山に入った人が行方不明になり、捜索に出動した当クラブが遺体を発見したこともあった。眺めのよい19峰を過ぎ、22峰で送電線をくぐった少し先で1日に来た道と合流する。かなりオバさんの足取りが重くなり、疲れてきたようだ。それなのに山菜だけは忘れず、ハリギリ、タラの芽などを採りまくっている。そんなに採ったって食べ切れないと思うのだが???。オバさん曰く「食べ切れなかったら近所にあげればいいの」だそう。生瀬富士の頂上には人はいなくて静かな山行である。ここから先も1日に通ったルートと同じなので、私が先行し、バイクで車を回収に行くことにした。

滝本への道を右に分けると、29峰あたりから眼下に見える袋田の滝は圧巻である。ここからの滝を見るためだけに、ここまで登ってきてもガッカリすることはないと保証する。それくらい素晴らしい景色だ。私が景色を褒めることなんてメッタないことで、それだけここは素晴らしい所である。31峰を走って下り、モンキーが見えたときは、いつもながらホッとした。もしかして盗まれていたら・・・と思うといつも不安があるのだ。車を回収し桜の木に戻つ

たら、ちょうどオバさんが降りてきたところだった。

月待の滝 (5:41) - 5峰 (6:22) - 7峰 360m (6:55) - 9峰 (7:31) - 10峰から11峰にかけて有刺鉄線 - 13峰 (8:31) - 14峰 370m (8:50) - 15峰は頂上通らず直下を右に降りる - 16峰 380m (9:10) - 19峰 400m 松の木ピーク (9:43) - 413、2m ピーク (10:00) - 送電線下 (10:24) - 分岐指 導標 (10:32) - 生瀬富士 (10:47) - 立神山の 次の松の木ピーク (11:17) - 滝本分岐 (11:36) - 生瀬の滝 (11:50)

(本図 記)



稜線から袋田の滝を見おろす

会津小野岳

2001. 4. 01

パーティー L木村一、名雪博二、松原丈夫、金沢清。

関東地方は土曜日の午前中雪が降り約5cmの積雪がありました。しかし午後から好天になったので三岩岳への再挑戦として名雪・木村・松原・木村の不良中高年メンバー4人は果敢にも奥会津に向かいました。塩原温泉を過ぎる頃から道路上に積雪があり、伊南川沿いに走る頃には4月というのに路面は真っ白になってしまい、ときには4輪ドラフトを交えながらの運転テクニックで(危なかったー。怖かったー。)無難に走り抜けたが、桧枝岐の手前では道路上で約20cm~30cmの積雪があり、夜半なので除雪がされていないので車が走り抜けると雪煙が舞い上がり、さながら真冬のラリーといった感じで三岩岳の登山口に着きました。小豆温泉の駐車場に車を止めて恒例の宴会。しかし、雪は一向に止む気配を見せないが『なんとかなるだろうー』と楽天的に考え深い眠りに落ちていった。翌朝目を覚ますとまだ雪が降っているではないか。『なんだ!!これはー。』『誰が悪いんだー』と互いに罵りあうが、冷静に周りを見ると完全に冬景色。この状態では雪崩が怖くてとても三岩岳に入る気にはなれない。『どうする?このまま帰る。』『どっか登れる山はないのかヨ。』と朝からビールを飲みながら協議した結果、会津小野岳に転進することに決定。そうと決まれば少しでも早い時間にと車を飛ばすが、道路は真っ白の為あまりスピードが出せないで時間が掛かってしまう。今日4/1から溪流釣りが解禁の為、道路わきの流れには釣師の姿が目立つ。自称『釣り名人』の名雪・松原の両名は竿を出したいらしいが諦めて貰い先を急ぐ事にした。観光スポット大内宿を経由して小野岳の登山口に着いたのが9:00、手早く朝食を採りスキー

にシールを貼り付けて林道から登高開始。密集した杉林を抜け、小沢沿いにスキーを滑らせ更に進むとブナの疎林の急斜面に出るが、アイスパーンの急斜面の上に新雪が降り積もっているので登り難く、ブナ林の中でなければ嫌な雪の状態である。ここから左手に見える稜線を目指して登り、稜線に出てからは忠実に稜線を登るが意外とアップダウンが多いのにはウンザリだ。金沢の清チャンは既にスキーでの登高は諦めてツボ足登高に切替えている。無雪期にはブッシュが多いと思われるブナの疎林の急斜面をキックターンを交えて登高するが、最後の急斜面は手前のコルにスキーをデポして小野岳の頂上に向かった。小野岳(1383m)の頂上は意外と広く、そこには地元山岳愛好会の集中登山の記念プレートが掛かっており、地元での人気の一面を窺う事が出来た。頂上で大休止した後、スキーデポ地点からはスキーを履き滑降開始、直滑降、斜滑降、いい格好とはいかず、不恰好な滑降に終始。早々とスキーを脱いだ金沢の清チャンの判断は正解?。下るに従い樹林が密集して濃くなり難儀するようになってきた。すでにスキーでの滑降を諦めてスキーを背中のザックに括り付けてしまった清チャンは『俺アーもう嫌だー』と叫びながら下っていった。しかし、名雪・松原・木村の3バカスキートリオは山スキーヤーの根性を見せて最後までスキーを抜かない覚悟だ。上から見るとどこを滑ったらよいか全く見当がつかない密集した樹林帯を下り、最後の杉林は木々の感覚が2m位しかない所を気合で滑り抜けてやっとの思いでスタート地点の林道に到着。ここで後続の金沢氏を待ち今回も無事下山。

下山後、大内宿に寄り蕎麦を食する予定で店に入ったが値段が高かったので食事は中止。相変わらず経済観念がしっかりしていると感心しきり。ここ大内宿は昔の古い集落がそのまま保存されており、現在も人が住んでいる様子だ。土産物店や蕎麦店を営んで生計を立てているらしいが、このよう

な所にくるとほのぼのとした気持ちになるのは我々も年を重ねたせいかな……。帰路左手奥に白く光る峰を発見。気になる山なので帰宅後地図で調べると三本槍ヶ岳と判明。来週チャレンジを胸に秘めて帰京。
(木村 記)

北アルプス 槍ヶ岳 北鎌尾根、小槍

2001. 5/3~6

パーティー L笹平孝、遠藤和彦、吉田仁、渡辺聡子

今回は、前から行ってみたかった北鎌尾根に行くことになった。大町駅近くのタクシー会社に明日の予約をして、そこの駐車場で仮眠した。翌日は、昨日降っていた雨も小降りになり、山には新雪が積もって、5月とは思えない光景だった。5月になると高瀬ダムまでタクシーが入るので、少し得した気分になる。ダムから湯俣までは、ダラダラ道を歩く。湯俣からは先は未知の世界で、北鎌尾根の核心とも言われる所なので気合いを入れて行く。まもなく1回目の徒渉になる。パンツが濡れなかったので、思っていたほど悪くはないが、水の冷たさには驚いた。右側の壁にはフィックスロープのある悪そうな道が見える。後は、河原を歩き四回の徒渉で千天出合に着いた。P2の登りは上部になると急になり、念のためロープを出した。P2の肩にはすでにテントで満席だったので、雪の斜面の所を整地してテントを張る。次の日は、P3で休んでいると、三月の時に谷川で一諸になった横浜のパーティと合い、話が盛り上がる。P4からは、懸垂で降りてP5のトラバースになる。ここで先行パーティに追い付き、先に行かせてもらう。トレースがあるので、特に問題なく行ける。P6の登りは、急な雪壁を登るとブッシュ帯になり、トレース

が無くなった。ルートを間違えてしまった。ここから降りようと思ったが、かなり登り過ぎていて上に、後続パーティが続々とこちらに登ってくるので、突っ込む事にした。ブッシュを掴んで登るが、なかなかうまく進めない。最後は、ブッシュの木登りでP7に出た。北鎌のコルを過ぎると独標の基部に着く。ここはロープを1P出して直上する。あとは雪壁登りでピークに出る。独標を降りたコルにはテントが張れるが、資料にはP11にテントが張れる所があるので、先に進む。P11のピークにはテント一張りくらいのスペースがあり、槍ヶ岳などがよく見える展望台で、ここにテントを張ることにした。次の日は、やせた尾根を登って行くと、やがて北鎌平に着く。ここまで来ると、槍の穂先は間近に見えて大きい。ここから傾斜が強くなり息が切れる。上部に先行パーティが登っているので、槍の基部で少し待つ。最後の登りは、急な雪壁になっていて、岩場の出てくる所から1Pロープを出し、槍の祠に出た。槍ヶ岳山荘に降りると、五月の連休なので沢山の人が出た。ここに荷物をデポして、小槍に向かうが、アプローチが判らなくなったの

で一度戻り、小屋の人に教えてもらったので、取り付きに行くことが出来た。凹角のルートは悪そうなので、登れそうな所に行く。1P目は、小槍基部からコルまで10M。2P目は、フェイスを人工混じりでバンドまで20M。アイゼンだったので、特にフリーの部分は神経を使った。3P目は、少し回り込んでからフェイスを登り、小槍のピークまで15M。ホールドが沢山あるので楽に登れた。小槍のピークからの展望は、ひと味違う物があった。下りは、懸垂下降を一回で、小槍基部に降りられる。槍ヶ岳山荘に戻り、ビールで乾杯する。ほろ酔い気分で槍沢を下

り、槍沢キャンプ場にテントを張った。焚き火とお酒でまた乾杯する。

次の日は、ワサビ沢でワサビを採り、上高地へ下りた。上高地から大町までタクシーで戻った。

5/3 大町ー高瀬ダムー湯俣ー千天出合ーP2

5/4 P2ー独標ーP11

5/5 P11ー北鎌平ー槍ヶ岳ー小槍ー槍沢キャンプ場

5/6 槍沢キャンプ場ー横尾ー上高地ー大町

(笹平 記)



北鎌尾根にて 遠藤・吉田・渡辺・笹平

那須三本槍ヶ岳

2001.4.8

パーティー L松原丈夫・吉田信一・木村 一・他2名

会津小野岳からの帰路、道路左奥に見えた白い峰が気になり、帰宅後地図で調べたところ那須三本槍ヶ岳と判明したので今週の山行になった。スキーを駆使して山を登るよう

になってから登山の対象とする山が多くなったような気がする。今回のメンバーは松原・吉田・木村の中高年トリオ+その他2名の計5名。塩原温泉手前の道の駅で

待ち合わせをして一路会津田島を目指した。大川(阿賀川)を渡り養鱒公園を通過して、大峠林道の最終点まで車を走らせ恒例の宴会後仮眠。翌朝5時起床。朝食を手早く取り準備を整えて6時にはスキーにシールを貼り出発。大峠林道は傾斜は緩く軽快にスキーを走らす途中数箇所雪が消えており、スキーを脱いだり、雪の消えた斜面を無理矢理スキーで歩いたりしながらいい加減嫌になった頃大峠林道の終点着。ここからはルートを変更して、大峠には向かわずそこから左手の急斜面を登る事にした。しかし、すこし登ると斜面が急になりシール登高の限界になったのでツボ足登高に変更。スキーはザックに紐で結び付け引張りながらのいつものスタイル。雪の締まった急斜面の登高は楽しいが、少々ブッシュが煩わしい。1汗かいた後、大峠から続く稜線上のプラトーらしい所にひょっこり飛び出しここで小休止。後ろを振り返ると流石山から三倉山への白い稜線が登高欲をかき立てる。流石山の右側斜面には新しい雪崩の跡があり滑降時には要注意である。しかし、三倉山へのは美味しそうな斜面が続いているのでぜひ来年は挑戦したいと思う。ここから三本槍ヶ岳までは右側に雪庇が張り出しているので登路をその反対側の斜面に採り、スキーを背負いツボ足で頂上を目指す。先の様子を伺う為に1人先行し、途中の露岩で穏やかな春山を満喫しながら後続を待つが今日この稜線は我々だけなので静かな山行だ。ここから頂上へは低いブッシュ帯の中の雪面を拾って登るが所々膝まで雪に没し非常に歩き辛い。三本槍ヶ岳の頂上には反対側の栃木県側から登ってきたスノーボーダー&山スキーヤーが数人いたので話を聞くと、栃木県側からはスキー場のリフトが利用できる所以効率的との事。頂上から我々が登ってきた稜線を見ると、左手の雲海が今にも稜線を飲み込みそうな感じである。山スキーで下降時に視界が悪くなって

苦勞したことが多々あるので早々に下降開始。低いブッシュ帯の上をスキーで強引に踏みつけて下降し、狭い雪面が出てきた所で遅れていた吉田信チャン合流。『ここから一緒に下る』と言うので、ブッシュ帯の中の狭い雪面を拾いながらの滑降。斜滑降&キックターンの連続でやっと広い斜面に出た時には、これでやっとまともな滑りが出来ると嬉しくなってしまった。登高時に休憩した所で小休止して大峠に向かってスキーを走らす、大峠の手前左手に美味しそうな斜面が広がっているではないか!!。思わず歓声を上げてその斜面に飛び込み、更に下に続く斜面を大峠に向かって快適な滑降。大峠からは濃い樹林帯の中を木を避けながらの林間滑降、右へ右へと下降しなければならぬのは分かっているが、濃い樹林帯の為に滑り易い谷沿いに滑降を続けた。『あれーこれはなんだー?』との声に左手を見ると流石山からのデブリがこの樹林帯の中まで押し出して来ているではないか。しかも木々をなぎ倒し、さながらブルドーザーで雪を押し集めたような感じで『誰かが除雪した雪を無断で捨てたのではないか?』との疑念が出るくらいの様子だ。ここにきて下り過ぎたらしいのに気が付き右にトラバース開始。木々を掻き分け、スキーを引っ掛けながら苦勞するが一向に見覚えのある所には出ない。途中意を決してスキーにシールを貼り、緩い斜面を右上気味に登高開始。いい加減嫌になった頃やっと見覚えのある林道終点に飛び出した。ここからは長い長い大峠林道をスキーで滑降と行きたいが、傾斜が緩い為にスキーが走らないのでスライド滑降で下るが大汗をかいてしまう。ここは大峠林道ではなく大汗林道と命名。

(木村 記)



飯豊山山スキー縦走（つらかった記憶）

2001・4・28～2001・4・30

パーティーL本図一統、木村 一、名雪 博二、渡辺聡子

原稿の依頼があったのは7月に入ってすぐだったと思うのだが、こうしてコンピューターに向かっている今は既に9月も終わりごろである。すぐに書かない自分が悪いのだが、半年前の記憶を呼び覚ますのはなかなか難しい。飯豊の記憶、飯豊の記憶と呪文のように繰り返してみると”つらかった記憶”ばかりがよみがえってくる。時間が過ぎるとつらかったことはすべて忘れて、よかったことだけが思い出されるという人がいるが、あればぜーったいにうそだと思う。つらいものはつらいんだ。さて、この飯豊の山行で何がつらかったかという、まず川入から三国岳の登りがつらかった。体調が悪かったせいもあるが、スキーをザックにくくりつけて歩くのはけっこう大変。つらい登りといえば烏帽子岳への登りがこれまたつらかった。その後の梅花皮山荘までの滑りがまた大変。スキーという物は雪の上を滑るものだと信じていた私にとって笹藪の中へ突撃するスキーもあるのね、と目から涙。梅花皮山荘では石転

び沢を登ってきた登山者が私たちの脇でもむろにカルビを焼いている姿とおいしそうなおいを無視するのがまたつらかった。今回の山行のメインイベントである石転び沢の滑降は何度も帽子やストックや板を置いたまま下までおりてきてしまい、環境を汚すことに心を痛める私はいちいち取りに降り返さなくてはならず、かなりつらかった。つらかったことばかりを書き連ねるのも何かなあ、ということでおもしろかったことや楽しかったこと。まずはおひさま。3日間とも晴れてくれたことに感謝。そして印象に残ったのは三国小屋に居た先行さんの見事な寝言。眠っているとは信じがたいはっきりとした声で「危ない！ロープ切れちゃう！」。どんな夢を見ていたのだろうか？？種蒔山からの滑降と御西小屋からの滑降。雪もいい具合で斜度もさほどなく、私にはとてもいい感じで楽しかった。袋いっぱいふきのとう、今回運転手をしてくださった鈴木さん（木村さんのお友達）にいただいたたくさんの山菜。しばらく堪能できた。あとはなんといっても飯豊の頂上を踏んだことかな。

（渡辺 記）

飯豊連峰スキー大縦走突撃山行

2001. 4. 28～4. 30

パーティー L本図一統、木村一、渡辺聡子、名雪博二

4月27日 夜、木村宅へ集合、車で鈴木氏を迎えに行き下館市役所へ集合即出発。飯豊突撃隊は本図司令を筆頭に木村、渡辺両参謀と本官の4名、此に車をまわしていただく遊撃隊紫峰山の会の鈴木大隊長と総勢5名の勇士。アツという間に(殆ど車で寝ていた)ので川入に到着しテントで寝る。

4月28日 突撃隊出発、ずーっと登りばかりでそーとーヨレて三国岳(三国小屋)到着昼一寸すぎくらいと思う、行く手を眺めると、この先切り合小屋迄1:30～2:00ぐらいなのに、相当遠く見える、それに三国小屋はかなり人が少なく快適そう、、、でまっ昼間からここに泊まることに、ビールを飲んで、ウイスキーをのんで、うまい飯食ってもーゆーことなし。

4月29日 朝早く出発、朝飯うまかった、スキーをはいたり、引っ張ったりして飯豊本山へそして御西小屋、こころあたりまでかなり、余裕のよっちゃん。大日岳の往復は、なにが何でも行かないぞ、と心に決めていたが、この余裕が悪かった、、、小屋にスキーをデポして行ってしまった。大日岳をオーフクして再び御西小屋についた時はもうそうとうチャンピオン足にきてしまった。明日の下山路が長いというので、さらにはるか先に、霞んで見えるカイラギ小屋まで行くことになった、向こうからきた若いアンチヤンに聞いたらかイラギ小屋は建て直したばかりですんごくきれいだと言う。此で元気が出るのがフツーだけんど、もー元気もへつたくれもない、またまたスキーはいたりひっぱったりしよったり。『ここで一

つ新発見』スキーをはいたりぬいだり面倒な時ひっぱるヒモつけたまんま2本のスキーにまたがって座り、ソリのよーに滑るっつーやり方がベンリ。だけどケツがヌレルの我慢してね。オリャー疲れ果ててジョーダンも言えねえ、んでもって死にそーんなって小屋着いてウイスキーの水割り飲んだ、ウメガッター。大日岳なんかいかなきゃよかったっつ、んでも御西小屋のすぐそばで、でっけーまあたらしいクマの足跡めつけてオットロシカッター。クマに追っかけられて御西小屋からカイラギ小屋まで逃げて来たっつうことだ。この小屋も余裕があつて、混雑はしない、夕方ちよっくらカイラギ沢覗いて見てビックリ!!いやいや急ナンダー、その上ながーいんだ、こわいんだー、怖いからあんまり見ないですぐ小屋に逃げ帰ってウイスキーガブガブ飲んで恐怖をまぎらわして、んでも全部飲んじゃうと明朝恐怖を紛らすことできねーからすこーし残して寝っちまったよ。いやはや今日はつかれたー。

4月30日 んで最後の日あんまり早いとクラストしてるっつうんで少しぐずぐずしてたけど、けっきょく、なんきょく、ほーそーきょく、7:00ぐらいには沢に突撃、こーんな急な斜面(40度)で、うーーんと長ーく続く斜面【700メートル以上あるんでわかないかと思えた】オットロシクで、すべれねー、おまけに荷物背負つては無理だなー、つうんで朝からウイスキー水割り一杯ひっかけて出たんだわ。いやいや本図、木村両先生さすがにスキーになれてんだよねー。うまいんだこれが、スイスイ行っちまって、オリャー心細

いよー。死んで元々生きてりゃ上等つう一ことで、地獄ノカイラギ沢に目をつぶって突撃だーっ、ほしたらこのながーい急斜面、3回転んで流されればなしで流されて、ここはどこ？私はだーれ？一体私はどこまで流れて行くのかしら？つう一感じでアッというまに急斜面を落ちて谷底の緩斜面につき刺さって私は生きていたのです。私は不死身だったのです。少し滑れたのは石転びの出合あたりまでで、それからはデブリの連続でいやいやも一大変、グズグズ、ズタズタの雪を越えて温身平をこぎまくり、飯豊山荘までやっとたどり着いたきゃーも一足はガクガク、肩はザックでへろへろでこっからが大変、林道の自動車道路に雪が斜面になってところどころ雪が消えていたり、地図で見ればたいした距離じゃーない、んでもザックしょってスキーつけて歩っちやー本当にやんなっちゃうよ。おまけにキョーレツな陽ざしでアセびっしょり、フキノトウの壮烈な争奪戦が始まり疲れた体に尚応える。もう絶対歩きたくないぞーっと思うころやっど長者原のカイラギ荘に着いた、腹へるし、のどはカ

ラカラ、体はだるく鬼のような疲労感、何が何でもすぐビールが飲みたいと思ったとき。

遊撃隊鈴木大隊長が山菜をイーッパイ（おーつきいタッパーに料理したもの）、と雪でギンギンにひやしたビールを用意して、車で我々を救出に来てくれたのでした。鈴木大隊長は神様です、後光が指していました、命の恩人です。こうして我々瀕死の飯豊突撃隊は息を吹き返したのですが、石転び沢で転んでいたのわ私だけじゃなかったよーです、多少の犠牲者も出たとのこと、中には二度とスキー縦走はやらないと、怒っていた人もいた、と大本営の発表があったよーです。

教訓その1

くれぐれもスキー縦走には気を付けましょう、さそうほうは良いことばかり言って誘うもんです、ついついだまされて行ってしまう人がおーいいそうです。

教訓その2

この季節あんまり人が多く無いので飯豊峰にはテントを持って行かなくても、イーデイヤこれほんどー。

(大本営山岳部 名雪発表)



飯豊本山にて(名雪、木村、渡辺)

三ツ峠岩トレ

2001. 5. 13

パーティー 日本一統、木村一、松原丈夫、金沢清、渡辺聡子、
じん（吉田仁）

今回は、人工主体のトレーニングに、峠に行きました。仕事の都合で俺だけ遅れて出発する。取りあえずガンバに道具を取りによって、みんなと如何に安く、且つ早く着くルートを選出して一人 jeep を走らせる。取りあえず都心だけ高速を使って垂水峠を軽快に飛ばして、無事、宴たけなわのテントに入り込む。翌朝、快晴！快適な登山道を岩場に向け歩き出す。四季樂園から岩場を見下ろすと、すでにクライマーでいっぱいだ。朝も早くからみなさん、御苦労さまです！この日は、やけに人工の練習に来てるパーティーが多くて、朝寝坊の僕達は場所を探しに右往左往するのでした。取り

あえずと言うか、無理矢理一本見つけて連集開始。まってる間に、横のフェースを登ったりして時間を潰す。そのうちに、いいエリアが、空いたので、取っ付きにザックを放り投げて、即効で場所取り成功！順繰りに何度も登り返して場所を占領する。ちよっぴり気分よし！結局下部でしか練習できなかったけど、まあ一、数こなしたからいいでしょう。俺には、今からソロで下道帰宅の大仕事がまってるし。そしてホントに、大核心でした。大月までが、メチャクチャ混で、たまらず道をそれる。あとは、ひたすら地図とにらメッコで、奥多摩経由で帰宅した。6時間以上も、かかったよ！疲れたあ〜！！

（吉田 記）



三ツ峠 直登カンテをリードする 渡辺

縫道石山（遠くの山シリーズ第6弾）

2001. 6. 1~3

パーティ L本図一統、木村一、渡辺聡子、木崎美穂（産総研山の会）、高田英行（同前）

遠くの山シリーズも今度で第6弾を数える。その内訳は縫道石山3回、西表島の沢2回、利尻山1回である。前にも書いたが、どこから先が遠くの山シリーズに入るのかと言えば、なんの決まりもない。ただ自分が遠く感じたら入れているだけである。

5月31日午後8時半、土浦に集合した。荷物が多く、積み込みに30分はかかると見込んでの集合時間である。5人交代で運転していくわけだが、道中が長いので（片道900キロ）運転手以外は寝て行けるよう工夫した。私が最初の運転手で、常磐自動車道から磐越道、東北自動車道に出たところで次の人と交代した。その後私は気を失ってしまい、気が付いたらなんとむつ市であった。まんずまんず良く寝たものだ。

1日。登山口に着いたものの雨パラパラのイマイチの天気。なんと俺ってついていないのだろう、ガックリ。俺が縫道石山に来たときはいつもこんな天気で気が滅入ってくる。気を取り直さずは幕営準備を始める。フライを張ってシートを敷いて、テントをたてて・・・、3回目ともなるとみなさん手慣れたもので、マキのある場所もすでに頭にインプットされているから早いものである。準備がすべて終わり、天気も少しは回復傾向なので、時間的にアタックは無理だろうが、取付まで行ってみることにする。今回は熊鈴をつけているのでカランコロンチリンと賑やかだ。昨年、月の輪熊異常接近の場所無事通過。まずは第一の核心部はOK。南東稜の取付に着いたが、パッと日が差したかと思うと雨がパラパラきたり不安定な天気だ。1ピッチ試登してみるかとの話も

でたが、結局登らず取付確認だけにした。昨年登った西稜の正しい取付とルートもわかかった。西稜はもう一度登っててもいい気がする。テントに戻ったが時間があるので、タラの芽と山ウドを採りにでかけた。ついでに近くの人家で水をもらう。縫道石山のテント場は、なにかも良いのだが水がとれないのだけが欠点である。今回の食当は高田シェフなので楽しみだ。山菜のテンプレを皮きりに、次から次へと料理がでてくる。中華鍋をふるう高田さんの姿は登山家ではなく、もう完全なコック長であった。焚火を囲んでシェフの作った料理に舌鼓をうち、ビール、ワインを飲みながら山談義。これが私にとって至福の一時なのである。

2日。4時に起きてみるが、ガスっていて相変わらずの天気。少し寝直す。このまま寝ていてもラチがあかないので食事を取って出発することにした。

テント登6時42分。いつもの天気に全員意気消沈気味である。取付に着いて登攀準備をしながら、今日のタクティクスについて話し合う。本図、木崎、高田と木村、渡辺の2パーティに分けて登攀の予定であったが、風は強いしガスで視界もないので、5人1パーティで登ることにした。南東稜登攀開始8時11分。1ピッチ目、正面のハーケンが2本ある凹角に取り付くが、出だしが悪くて少してこずる。トポによると中間部から左斜上と書いてある。自分のルートファインディングだと右斜上の方が易しく見える。でもトポを信用して傾斜のきつい左を直上しテラスにはい上がる、45m。残置は出だしの凹角に2本あっただけであと

はノーピン。あとで渡辺に指摘されたが、やはり正しいルートは右斜上だったようだ。トボを書いた奴が悪いのではなく、信用した俺がバカだったのだ。2ピッチ目、フェイスを登り通常ルートに合流し、ブッシュ付の凹角を行くと大テラスにでた。大テラスは少し外傾しているが、広くてとても気持ちの良い所だ。このころから天気が良くなり視界もきき北海道まで見えてきた、45m。3ピッチ目、チムニーに入り少し登ると、チョックストーンのオーバーハングに頭を押さえられるので、右か左から抜けようとするも悪く、行っては戻ってを繰り返す。フレンズをセットして思い切って乗越すとツルムの頭に出た。眺めは良いのだが風が冷たくてちょっと寒い、30m。

4ピッチ目、15mの懸垂下降でコルに降りる。コルからは、ブッシュ沿いに南壁側に簡単に降りられそうで、非常の時はエスケープルートになりそうである。風の当たらない場所に移動して休憩をとる。トボに書いてある南東稜のトンネルとはどんなものかと、いろいろ想像していたが、大きなチョックストーンとあってよいだろう。でも見事なもので、人ひとりがやっと通れる幅で長さ5mといったところか。5ピッチ目、トンネルの手前右手の壁に取り付き左斜上する。ちょうどトンネルの上に出たわけだ、15m。ここは完全なキレットになっていて風当たりが非常に強く寒い。6ピッチ目、いよいよ南東稜の核心部だ。このピッチと次のピッチが核心部とあって間違いあるまい。あまり効いていなそうなハーケンに乗り、人工で直上後、悪いフリーで左にトラバースするとレッジに立つ、10m。ビレー用の残置

ハーケンを手で触っただけで抜けてしまった。そこにハーケンとフレンズで支点を作る。このレッジは3人集まるのがやっとなので、5人パーティだといろいろと時間がかかる。また天気が悪くなり、ガスってきたので寒さも一段と増して、正直のところ私は登攀を中止して帰りたくなった。他のみなさんは、雨具やフリースを着ているようだが、私は登攀中なので着る機会を逃してしまったのだ。7ピッチ目、フレンズにアプミをかけ2ポイントの人工後、フリーで傾斜の強い凹角をほぼ真っすぐに登る。凹角といってもフェイスと違って良いくらい浅いものである。残置はほとんど無く、フレンズとハーケンを打ってランナーをとっていく。20mくらいはランナアウトするのでちょっと恐いが、岩が堅いので思い切ったクライミングができるので気持ちがよい。でもそう思うのは今になってからであって、登っているときは結構恐かった、45m。8ピッチ目、岩の弱点についてフェイスを登る。易しいのに、このピッチは残置ハーケンが目についた。ビレーポイントのようだったが腐っているものがほとんどだった、40m。私がビレーしたテラスには水晶があった。水晶といっても持ち帰るほどの程度の良い物ではなく小さい結晶だけである。やはりこの岩は花崗岩なのであろう。9ピッチ目、傾斜が落ち、大きな岩がゴロゴロしているようなところを45mで頂上に着いた。16時58分。全員登ってきて完登の握手。天気も回復して北海道もバッチリ見えて「最高ですかあ？」と聞けば「最高で一す」（どこかの宗教団体ではないが）という答えが返ってきそう。5人パーティなので時間もかかったが、これも仕方ないことであろう。ギアチェックを行い、日が暮れないうちにと早々下山開始とする。

完登後の宴会は盛り上がる。御馳走を前に飲めや歌え（いや、歌わない）の楽しい宴会は夜遅くまで続き、一人二人と姿が消えていっ

たので私も寝ることにした。3日。今日も朝から天気は良くない。毎日同じような天気が続いている。登攀はしないで大間崎を回って帰ることにした。大間崎で本州最北端の温泉（大間温泉）に入った。いくつかある湯船の中で源泉の湯船があった。私は熱いお風呂が好きで“よくこんな熱い風呂にいれるな”と言われるほどだが、足をちょっと入れただけで飛び上がった。私には熱くてとても入れたものではない。帰りにフロントで「あの源泉は何度ですか？」って聞いたら「47度です」だって。俺に入れる訳ないよ。でも、入っていた人がいたけどヤケドしないのだろうか？？？。上には上がいるものだ。あとは一路茨城を目指して走り続けた。来年は縫道石山はお休みにしようかな。また2～3年後来たいものである。

(本図 記)



古賀志山 岩トレ

2001.5.27

パーティー L笹平孝、渡辺聡子、遠藤和彦

古賀志山に行くのは初めてであった。前日10時に下館市役所へ。ここにくるのも数年ぶりだ。古賀志の入り口は、お店の隣の何の変哲もない道で、看板もないので、知っている人が居ないと分かりにくいだろう。そこを入っていくと最初の二股分岐で右である。はじめは右に進んでいたのだが、取り付きの場所が特定できず、道を間違えたかということで先ほどの分岐に戻って左に行ってみると、こちらでも違うということになり、再び元の右の道に戻った。夜の林道でうろろろしてしまった。ようやく入り口の駐車場を見つける。結局最初の道でよかったのだった。テントを張ると、ぽつぽつ雨が降ってきた。これが夜通し続くことになった。翌朝もばらばらと降っており、登れな

かったらジムに行こうという話になる。山道を10分ほどで神社の前へ。次第に雨が上がり、驚くことに岩場は乾いていた。神社の横のルートは、フリーだと結構きついただろう。渡辺さんでやっただそうだ。今回は秘密兵器を取り出して、そこをアブミで越えることになる。アブミに乗るのは10年ぶりだった。前に一度グレンデで練習したことがあるのだが、もうすっかり忘れていた。上部には若干のハングがあり、私はここで敗退。だいぶ時間が経って午前中はこれで終了。午後になるとグレンデにもぎわってきた。宙吊りからの脱出訓練等をやって、最後に一番左のルートをフリーで2ピッチ登る。ここは楽だった。雨降りかどうかと思っただが、なかなか満足できる練習会だった。

(遠藤 記)

富士山 山スキー

2001.5..20、

パーティー L木村一、笹平孝、渡辺聡子、名雪博二、松原丈夫、吉田信一、
小林（産総研山の会）

日本一の山、富士山頂からのスキー滑降は長年の夢でした。昨年の12月に富士山での雪上訓練時に遠藤君から得た情報で今回の山行になった。やはり同じような考えのメンバーは、東京から名雪、松原、吉田の3名、茨城からは木村、笹平、渡辺、小林の4名の計7名。新5号目まで夜中に上がれて、更に通行料金の無料な富士宮口からルートを決め、東京のメンバーとは新5合目の駐車場で合流する事にした。ところが新5合目に着いてビックリ。駐車場には車が沢山止まっていて富士山はこんなに人気があるのかと思ったが、なんと天体観測愛好家が大多数。さらにその装備を見て驚愕、おそらく数十万円や数百万円はするであろう天体望遠鏡がずらりと並び、その付属装置が凄いの一言に尽きる。やはり趣味の世界は奥が深く様々だなーと感心してしまった。恐らく山登りの世界も他の趣味の世界からみた場合には同様に見られるのかな？。恒例の宴会後車の中で就寝。翌朝5時起床6時出発。スキーはザックに括り付けて背負い、プラブーツで富士山の火山砂礫の上を歩くのは歩き辛い、夏道沿いに登り6合目の山小屋に到着。ここで用を足そうと思ったが、山小屋は開いていないのでかなり苦労して用足し。下の駐車場からは『富士山ではスキー&スノーボードでの滑降は禁止です。』との声がスピーカーから流れてきた。どうやら警察のパトカーがきて注意を促しているらしいが、誰も下山する人はおらず、下からは続々とスキーヤー&スノーボーダーが登って来るではないか!!。ここは無法地帯化か？我々は法を犯すことに後ろめたさを少し感じながら頂上を目指した。頂

上へは7合目、8合目、9合目と夏道を辿り、9合目からは雪の上に刻まれたステップを踏んで頂を目指す。頂上直下は岩が露出しているので慎重に歩をすすめ、鳥居をくぐると富士山の頂上の一つ銀名水に到着(10:40)。ここにスキーをデポして剣が峰にある測候所の銀のドームを目指した。右手には火口内壁の美味しそうな斜面が広がっており、いくつかのシュプールが見られる。時間があれば是非滑ってみたい所だ。日本最高地点の標識で記念写真を撮り、銀名水に戻り小休止。小休止後頂上直下の岩場を慎重に下り雪面でスキーを履き滑降開始。傾斜が30度位の1枚バーンを好きなようなシュプールを描いて各人が滑降していく。9合5勺付近に砂礫が露出しているので右に回り込んで少し下り、下に続く大斜面を富士山の裾野に向かって大滑降。先行しているテレマークスキーヤーは『ヒャッホー』と歓声を上げながら華麗なテレマークターンで滑降していく。高度が高い所の滑降なので途中立ち止まる回数がいっつもより多いが、笹平氏は今回ゲレンデ用スキー&ブーツを持ってきているので滑降姿勢が一番決まっている。8号目付近まで滑降すると雪渓が切れるので、スキーを脱いで横に40m程トラバースして、2m位のクライムダウンで隣の雪渓に入り再び快適な滑降。7合目付近で更に右の雪渓に入り6号目の山小屋の上まで滑降することが出来た。小屋の横で大休止した後、スキーをザックに括り付けて砂礫でガラガラの夏道を少し下り、5合目駐車場の上に続く雪渓に入るが、ここは下の駐車場から丸見えなのでギャラリーが多いので格好良く滑り駐車場着14:00。やはり

日本一の山富士山は素晴らしいところだ。来年はぜひ吉田大沢を滑ってみたいと思いながら新5合目を後にした。

(木村 記) 富士山山頂での小林、渡辺、名雪、木村



会津駒ヶ岳 山スキー

2001.5.4

パーティー L木村一・軽部都夫（紫峰山の会）・鈴木正春（紫峰山の会）

ゴールデンウィークの前半は飯豊連峰のスキー縦走で雪山を十分に堪能したが、その時に車の運転をして頂いた、紫峰山の会の鈴木さんと紫峰山の会会長の軽部さんと私の3人で会津駒ヶ岳と麓ヶ岳の山スキーに松枝岐に向けて車を走らせた。会津駒ヶ岳の登山口滝根橋の所に車を止め恒例の宴会後仮眠。翌朝5時起床6時出発。今年は雪が少ないので全く雪の無い林道を会津駒ヶ岳への尾根の取り付け口の木梯子まで歩く。鈴木さんも軽部さんも山スキー専用靴を持っていないので、グレンデスキー用の靴を背負っての登高なので、スキー板の重量と合わせてザックの重さが肩に食い込んでいる様子だ。軽部さんはスキーでの滑降は既に諦めて途中でスキーをデポしてしまったら

しい。暫く尾根を登ると松枝岐の共同アンテナ付近からは雪を踏んでの登高開始。更に登ると緩やかな尾根上のブナの疎林で下降時が楽しみな所だ。標高1900m付近からは樹林も疎らとなり、やがて小さなピークを越すとむ木立の白い斜面が目の前に広がってきた。今日は天気も良く駒ヶ岳の頂上も穏やかな姿を見せている。どこでも滑れるような素晴らしい斜面が続くが駒ノ小屋まではまだ距離があり更に汗かいてしまう。駒ノ小屋の前で大休止。鈴木さんはビールを飲みここで待っているとので、軽部さんと2人で駒ヶ岳の頂上に向かった。ドーム状の頂上は広く既に大勢の人が憩っていた。ここから眺める白銀の山々は素晴らしいの一語に尽きる。奥只見の山々、越後の山々、東北の山々、目前には明日登る予定の麓ヶ岳がその勇姿

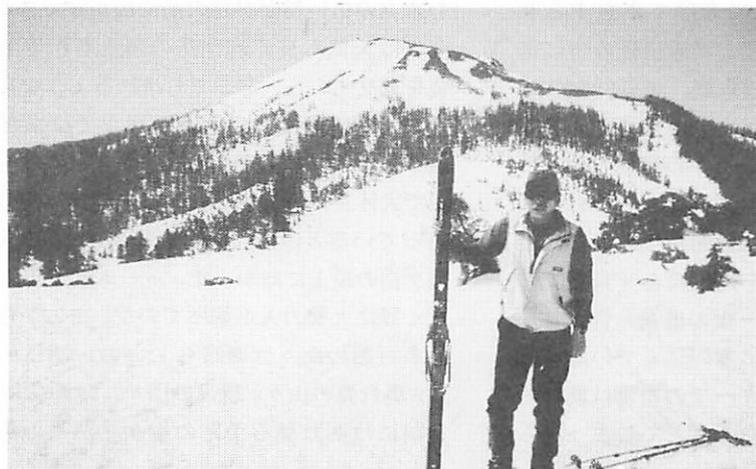
を誇っている。ここから眺める麓ヶ岳は滑降予定の御池コースの急斜面が白く輝いて望まれる。またすぐ近くには大戸沢山から三岩岳への尾根が波打っており、来年はぜひ会津のオートルート(会津駒ヶ岳～窓明山)を滑ってみたいものだ。いよいよ頂上から滑降開始。駒ノ小屋までの斜面をイッキに滑り降りて鈴木さんと合流し、行動食を取りながら下を見ると沢山の登山者が続々と登ってきている。さすが百名山は人気があると感心してしまう。駒ノ小屋下の斜面を快適に飛ばし、やはり春山はスキーに限ると1人感心しながら手前の小ピークで後続を待つ事にした。スキーを使用しない軽部さんとあまり離れないよう

にしながらブナの疎林の中を快適に滑降。下るにつれて木々が多くなるが山スキー初体験の鈴木さんはチョット苦勞している様子だ。途中左に寄りすぎてかなりの急斜面をトラバースする羽目になってしまったが、登るときに目印にした共同アンテナのところで後続を待ち、更に下の急斜面に飛び込むが数ターンで終了。ここからはスキーをザックにつけて林道を車の所まで下山。11時半。まだまだ日が高いので山菜採りと溪流釣りで今晚のおかず調達。夕食は岩魚とフキノトウの天婦羅で今日の山行の成功と明日の無事を祈って乾杯。桜枝岐の夜は静かに更けていった。

(木村 記)



会津駒ヶ岳 駒ノ小屋前にて
木村、軽部、鈴木



麓ヶ岳をバックに 木村

燧ヶ岳 山スキー

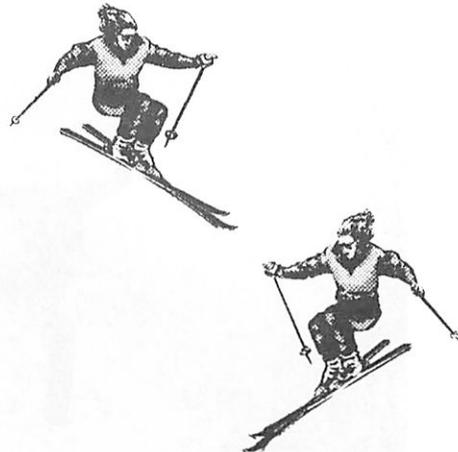
2001. 5. 5

パーティー L木村一・軽部都夫（紫峰山の会）・鈴木正春（紫峰山の会）

山スキーの場合には雪の腐る前に頂上から滑り出すのが快適に滑る基本なので、昨日の会津駒ヶ岳の疲れが残っているが朝5時起床5時30分出発。年を重ねたせいか朝の早いのは平気である。ここ御池の駐車場には雪が沢山残っており、帰りには車の側までスキーで滑り降りる事が出来そう。雪が縮まっているので今日もスキーをザックに括り付けて背負っての登高である。最初は傾斜の緩い針葉樹林帯の中の登高だが、しだいに傾斜を増しキックステップで高度を稼ぎ、広沢田代の白い雪原にとび出した。雪原の手前で小休止して広い雪原を渡り、ブナの疎林の急斜面を再びキックステップで登り更に進むと、熊沢田代を見下ろす広い台地にとびだした。ここからは熊沢田代の広い雪原の後ろに三角錐の白い燧ヶ岳の姿が聳え立ち、これから我々が登り、そして滑降するルートが一目瞭然である。台地から熊沢田代の雪原にはスキーで滑り降り、その広い雪原を横断して上部の樹林帯に入って緩い登りを過ぎると、ダケカンバの点在する広い斜面が目前に広がってくる。この広い斜面を滑ることを思うとワクワクしながら、ダケカンバに沿って左上気味に登ると稜線に飛び出す。更に左に行くと標高2346mの俎嵩山頂に立つことが出来た(8時30分)。頂上からは尾瀬沼の白い雪原、至仏山のなだらかな山稜、昨日登った会津駒ヶ岳、越後駒ヶ岳、平ガ岳等の山々を見渡すことが出来て最高の眺望である。頂上で眺望を満喫しながら大休止をした後いよいよ滑降開始。山頂直下でスキーを履き、

硫黄沢上部をトラバース気味にスキーで滑り降り、登る時にワクワクした大斜面に飛び込んだ。今日はまだ誰も滑っていないので雪面が荒れておらず、思うようにシュプールが描けるので気持が良い。軽部さんはこの斜面の滑降に自信がないので登ったルートを少し下り、傾斜が落ちた所から滑るとの事。アッという間に大斜面の滑降が終わり、鈴木さんが待っている樹林帯の入口に着いてしまった。ここからは3人一緒に林間滑降で熊沢田代の広い雪原に滑り込み、更に少し登って台地状の所で大休止。振り返ると燧ヶ岳の白い大斜面に自分が描いたシュプールが確認できて最高の気分だ。ここからはブナの疎林の急斜面、広沢田代の広い雪原、その下の針葉樹林帯の急斜面等が控えており、山スキー初デビューの2人にはチョットきついかも知れないが、もし危険を感じたらスキーを脱いで下るとの事なので一安心。山スキー経験者にとっては美味しい林間の斜面を、後続を待ちながらの滑降で急斜面下で全員合流し、無事御池駐車場着(11:00)

(木村 記)



谷川岳幽ノ沢V字状岩壁右ルート

2001.6.5

パーティー L笹平孝、遠藤和彦、吉田仁、渡辺聡子

土曜夜に一の倉出会に到着。この日はアルパインMLのオフミが行われているようで、一の倉出会にはそれらしい方々が大勢宴会をしておりました。我々はテントを張って仮眠モード。雨はしとしとと降っています。翌朝目覚めると天気は次第に良くなってきました。今回はアプローチの靴に、幽の沢の沢靴にクレッターと3種類の靴を持っていきました。幽の沢の出会いで沢靴に履き替えて、早速登り始めましたが、5分もしないうちに雪渓歩きとなり、沢靴は要らなかったようです。でも、沢靴の雪渓歩きも意外に歩きやすいことを発見。しばらく雪渓歩きを続けて、丁度二股に到着した瞬間、上部の方で、「ゴーーー」という爆音が聞こえるではありませんか。ウェー、、、雪渓崩壊だ！と思って慌てて岩陰に隠れましたが、デブリはここまでは到達しなかったようです。気を取りなおして登り直すと、あるわあるは大きな雪塊が。こんなのに直撃されたらひとたまりもないでしょう。やがてカールボーデンへ。開放的な明るい雰囲気のスラブでした。ところが、ここで2発目が。今回は先行が1パーティーがいたのですが、彼らは要のトラバー

スで苦勞しているようでやな予感がしたのですが、彼等がラークと叫ぶので、上を見上げると、小さな石が2個落ちたようです。我々はだいぶ右端にいるし、こちらには来ないだろうとたかをくくっていたら、なんと我々直撃コース。直撃をうけたらただでは済みそうにない。戦争中に爆弾が飛んでくる時の心境はこんな感じだったのだろうか。と、ふと頭によぎりました。ぎりぎりセーフ。しかし手前でイレギュラーバウンドをして細かく割れたかけらが、笹平さんのひざにあたりました。幸い無事のようにでしたが、落石は怖いですね。登攀の方は、出だしの要のトラバースが少々いやしかったのと、所々濡れていたところが不快でしたが、各ピッチとも簡単に、爽快な登攀ができました。程なく尾根に到着し、一般ルートを引き返しました。幽の沢出合から一の倉出会に戻る途中は、コシアブラがたくさん採れました。

二子山西岳山頂にて 本図



二子山中央稜

2001.4.8

パーティー L本図一統、渡辺聡子

ある日の集会で「最近のおめーの原稿は読んでいてちっともおもしろくない。もう少し読んで楽しい文章を書け!」と言われた。うーん・・・そう言われてもな・・・と思いつつ、今回は岩トレの原稿である。二子の中央稜は人気ルートと聞いていたので待ちを覚悟していたのだが、岩場には人影がほとんどなく、中央稜に取り付こうとしているのは我々だけだった。それが目的で来たのだが、やはりリードとなると緊張する。「1ピッチ登ってしまえば落ち着くから。」という言葉を信じて取り付けてみると、ホールド、スタンスとも豊富で緊張がやわらいでいくのがわかった。「せつぱくなんだからレイバックで登れ。」といわれるが、そこまでの余裕はありません。一呼吸おいて核心のピッチに取り付く。ワンポイントだけだがなかなか足をあげられない。やはりV級は余裕が無くなる。このピッチが終わり大テラスにでると斜度はぐっと緩やかになり、岩も階段状であった。2ピッチで終了点に無事到着。登山道を下るかどうか迷ったが、こんなにすいている中央稜もめずらしいということで懸垂でおりにしたのだが、最初の懸垂でロープが引っかかってしまい、登り返すは

めになった。もしかしたら素直に登山道を降りていた方が時間的には早かったかもしれない。大テラスまで降りたとき、3人パーティーが右のほうから登ってきた。核心のピッチを登らない”巻きルート”があるそうで、”岩場の二子山部屋”と名乗る彼らは毎週のように中央稜を登り、大テラスで宴会をしているとのことだった。取り付きに戻ると本図さんが「登り足りない」と叫びだした。二子山で私たちに登れるルートは他にないでしょう、と思ったが探してみるとあるもので、隣にあったローソク岩を3本登り終了とした。ジムで顔見知り中央稜に行ってきたことを話すと「いいなー。オレ中央稜のぼってみたいんだよねー。でも恐くてさー。」と言われた。そのお方、その後本図さんに頼み込んで連れていてもらう約束をしたとうれしそうに話していたが、でもあなたあそこの”即身仏”のぼってるじゃない!!

前に吉田さんも書いていたが岩トレの原稿は確かにつらい・・・。

(渡辺 記)

《 友好山岳団体の月報、会報、その他 》

ありがとうございました

月報

- ◎ Rohman NO. 191 2001. 4. B5 20P 浦和浪漫山岳会
川内・五剣谷岳東尾根左稜、守門岳三人くら尾根ほか
- ◎ Rohman NO. 192 2001. 5. B5 40P 浦和浪漫山岳会
毛猛・足沢山~太郎助山、春合宿・川内を3パーティで縦走、サポートも交えて大成功、ほか
- ◎ Rohman NO. 193 2001. 6. B5 20P 浦和浪漫山岳会
732高地~阿弥陀沢左俣~阿弥陀山~阿弥陀沢中間尾根、総勢23名による山菜山行の報告ほか
- ◎ わらじ NO. 541 2001. 4 B5 18P わらじの仲間
利根川横断~尾瀬周辺の山~袖沢~黒谷川~南会津、南会津、稲子山山スキー、妙義山、冬の集中・荒沢岳
カドナミ尾根、足拍子岳南尾根、北尾根ほか
- ◎ わらじ NO. 542 2001. 5 B5 30P わらじの仲間
利根川横断~尾瀬周辺の山~袖沢~黒谷川~南会津、妙義山、越後駒ヶ岳水無川モチガハナ沢Y字ルンゼ
左稜、巻機山山スキー、平ガ岳&会津駒ヶ岳ほか
- ◎ わらじ NO. 543 2001. 6 B5 12P わらじの仲間
北ア・新穂高温泉~双六岳~黒部五郎岳~薬師岳~雄山~池ノ平~馬場島ほか
- ◎ 逍遙 NO. 119 2001. 4 B5 14P 逍遙溪稜会
湯河原・幕岩、丹沢・葛葉川、広沢寺、勘七の沢、鬼石沢ほか
- ◎ 逍遙 NO. 120 2001. 5 B5 10P 逍遙溪稜会
南会津・三岩岳~窓明山、丹沢・モロクボ沢ほか
- ◎ 逍遙 NO. 121 2001. 6 B5 24P 逍遙溪稜会
奥多摩・北秋川神戸川クドレ沢左俣、小坂志川本流、巳の戸谷、尾瀬・赤倉岳、台高・往古川真砂谷~堂倉
谷~石楠花谷、奥秩父・東沢釜の沢、昇仙峽、板敷溪谷、奥秩父・古礼沢ほか
- ◎ Next! NO. 64 2001. 4 B5 6P 山岳溪流釣り集団むげん
仲間の近況報告、岩魚いろいろ、ほか
- ◎ Next! NO. 65 2001. 5 B5 10P 山岳溪流釣り集団むげん
仲間の近況報告、くろすばいんと・友好団体会報紹介ほか
- ◎ Next! NO. 66 2001. 6 B5 12P 山岳溪流釣り集団むげん
奥秩父・滝川八百谷ほか
- ◎ とまのかぜ NO. 101 2001. 4 B5 38P 童人トマの風
栗子・摺上川山スキー、ミニスキーは面白い、空蔵山山スキー、吾妻耶山、博士山、屋久島・女川、佐渡・山
毛嶺ヶ平山、谷川・大源太山コマノカミの頭ほか
- ◎ とまのかぜ NO. 102 2001. 5 B5 46P 童人トマの風
頸城・笹倉温泉~火打山、海谷・昼間山、白山、燧が岳、月山、大雪・旭岳、北鎮岳、西表・クイラ川~仲良川~
浦内川、利尻山、暑寒別岳、朝日・東大島川源流縦走、槍・北鎌尾根、利根川源流山スキー、八幡平、白馬主稜、
天覧山救助訓練、奥多摩・小川谷ほか
- ◎ とまのかぜ NO. 103 2001. 6 B5 61P 童人トマの風
北信・鍋倉山、谷川・仙ノ倉北尾根、守門岳山スキー、栗子・杭甲山、雨飾山、越後駒ヶ岳、栗駒山山スキー、
越後・大毛無山山スキー、南ア・蝙蝠尾根~塩見岳、越後・阿寺山南西尾根、中の岳、越後駒ヶ岳ほか
- ◎ 山紫水明 NO. 72 2001. 4. B5 6P 山旅の会
十二が岳 RCT ほか
- ◎ 山紫水明 NO. 73 2001. 5. B5 7P 山旅の会
御嶽ボルダー、丹沢・葛葉川ほか
- ◎ すずらん通信 NO. 240 2001. 4 B5 18P 鈴蘭山の会
家形山山スキー、籠ノ登山、湯ノ丸山、谷川・平標山山スキー、双子尾根~杓子岳、信越・白砂山、越後・日白
山&仙ノ倉北尾根、蔵王・刈田岳ほか

◎すずらん通信 NO.241 2001.5 B5 23P 鈴蘭山の会

蔵王乞食山行く、越後・神楽ガ峰、布引山山スキー、谷川・七つ石山山スキー、谷川岳雪上訓練、鳥甲山、谷川・芝倉沢山スキー、尾瀬・至仏山〜平ガ岳山スキー、頸城・三田原山〜火打山山スキー、鳥海山山スキーほか

◎すずらん通信 NO.242 2001.6 B5 21P 鈴蘭山の会

扇沢〜鹿島槍ヶ岳、抜戸岳山スキー、後立山・八方沢〜不帰沢山スキー、南八甲田山スキーほか

◎溪游 NO.114 2001.4 B5 8P 溪游会

台高・武木川本流、蓮川ヌタハラ谷、大峰・前鬼川本流、芦廼瀬川本流、石鎚山・老之川初芽成谷ほか

◎溪游 NO.115 2001.6 B5 10P 溪游会

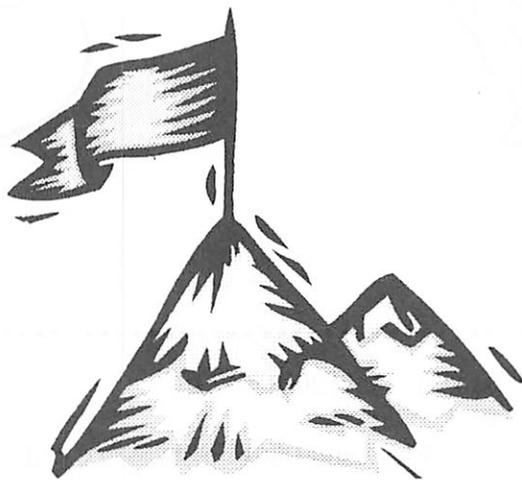
八ツ・天狗岳、北播・岩野辺川小河内谷、越前・部子山、開聞岳、韓国岳、高千穂峰、鈴鹿・野洲川元越谷、奥美濃・釈迦嶺、氷ノ山・宮ノ下川滝ノ谷ほか

会報

◎潮行 NO.20 2001.4 B5 90 大阪わらじの会 (池上昌司さんからの寄贈)

黒部・猫又谷〜カシナギ深層谷、中央ア2本、白山2本、鈴鹿3本、台高5本、大峰17本、南紀、和田川鳴谷、屋久島・瀬切川ほか

以上閲覧したい方は本図まで





岩壁、沢、冬山のクライミング集団